

スポーツで元気になる福島

昭和三十九年 野沢 凜成
ノザワ リンセイ

私は多くの人々が福島で体験をすることが必要であると考えます。そのために、福島のスポーツと連携すべきです。

現在、県内では人口減少・高齢化が進んでいる。その対策として子育てしやすい環境、女性が働きやすい環境を整えている。その中でも今回は移住を受け入れる事業に焦点を置く。福島県では、移住の際の空き家改修費の一部補助をする制度がある。しかし、他の地域でも高齢化対策に移住の初期費用補助を行っており、差別化を図れているとは言い難い状況だ。数ある地域の中から福島を選ぶ可能性は低い。以前から福島という地域に関心を示している人も、年に一度か二度訪れる程度であり、数百キロメートル離れた地に移住することはハードルが高い。そのために、福島に移住する体験ができる施設が必要である。移住に関心を持ち、福島に家を構えても違和感を感じてすぐに引っ越してしまったり、意味の無いことである。ミスマッチの無い移住のためにも、体験は必要である。しかし、移住するには複数日が必要とするため、参加者の職務に支障が発生しやむを得なく参加できないケースなどが多数考えられる。そのため、移住体験もできワーケーション施設としても利用できるようなものが理想である。しかし、どんなに素晴らしい施設が建っていても、利用者を作らなければ効果を発揮しない。私は集客という課題に対してスポーツを活用すべきだと考えている。現在、福島県に本拠地を置くプロスポーツチームは2つある。バスケットボールの福島ファイヤーボンズとサッカーの福島ユナイテッドFCである。どちらも各競技のトップリーグではないが、1部リーグ昇格に向けて毎試合熱く戦っている。これらのクラブが所属するリーグでは総当たり方式で順位をつけている。また、ホームアンドアウェイ方式で行っているため、対戦相手チームの選手や関係者、ファンなどは試合を目的に福島を訪れている。更に、ファン層はスポーツ観戦の前後にその土地の観光名所などに足を運び、飲食をする方が多い。上記のような方では、アウェイ試合に足を運ぶ度に観光をしているため、各地域ごとに比較をしている。より福島を印象的に思ってもらうには、おもてなしすることも大切だが、共に体験することが最も効果的である。試合の前後などに移住体験をして

もらい、より福島を印象的に思ってもらうことが第一歩である。ファンの一部の方は、仕事を休んで観戦に行く人も少なくはない。そのような人のためにもワーケーション機能もある施設は理想的である。

サッカーチームの福島ユナイテッドFCには農業部というものがある。選手やクラブスタッフは桃やお米など計6品目を生育している。移住体験の特典として選手とともに農業を体験できるような機会があれば主に2つの利点がある。1つは食育となることだ。現在、都心部では店舗に並んでいる状態の農作物しか見たことがなく、どのようにして実がなるかを知らない人が急増している。このような人々にも参加してもらい、手元に届くまでの経緯や食の大切さなどをスポーツを通じて感じて頂きたい。2つ目は安全性を示すことだ。福島県は2011年の原子力発電所の事故により、「福島の食べ物は危険」といったイメージが定着してしまっている。その中で、他地域から来訪した人が1日でも福島での農作業を体験することによって、自分の目と手で安全性を感じることができる。また、収穫ができなくても、自分の手の加えた農作物が成長し、店舗に並ぶ姿を見ることができたら親近感を感じるようになる。また、「福島県産」をより身近に感じて頂ける。そしてリピーターとなり、他県民でも福島県産でできた体で健康に生きていくことができる。

現在、福島県のイメージを問われたら、震災や原子力発電所など負のイメージを持つ人が多いであろう。そのような人々は、福島県の良い点「福」に気づいていない。人々に希望を与えるスポーツを通じ、自分だけの福島の「福」を見つけてほしい。いずれ、福島でのスポーツ観戦の帰りに体験をすることが恒例となり、福島に移住するきっかけを持ってくれる人が1人でも増えるのが私の理想だ。